「真理とは何か」

H・P・ブラヴァツキー

真理は自然の声であり、時の声である。真理はわれわれの中の驚くべきスクリーン（モニター）であり、それなしにはありえない。それ（真理）は星々から、黄金の太陽から、そして吹くすべての風からやってくる。.

. . W・トンプソン・ベーコン

・・・公明正大な真理の不滅の太陽

それは時々雲に隠れ、その光は太陽自体に欠陥があるわけではなく、見えなくなっているのだ

私の薄弱な先入観と不完全な信仰によって

そして善の成長を妨げる一千もの原因によって。・・・

ハンナ・モア

　「真理とは何か？」と尋ねたピラトは、キリスト教会の主張がほぼ正しいのであれば、それを知っていたに違いない。しかしピラトは黙っていた。そして彼が明かさなかった真理は、ローマ総督と同様に後の信奉者たちにも明かされないままであった。ところが、イエスの沈黙はこの時も他の時も、現在の弟子たちが究極的で絶対的な真理そのものを受け取ったかのように振る舞うのを妨げるものではない。たとえ話や、美しいけれども暗い格言だけが真理の一部を含む智慧の言葉として人々に与えられた。

[イエスは「十二人」に言われた、「あなたがたには神の国の謎が与えられているが、そうでない者たちには、すべてのことはたとえ話で行なわれている」(マルコ4.2)]。

　この方針は、しだいに教条主義や断定へとつながっていった。教会における教条主義、科学における教条主義、どこもかしこも教条主義である。抽象的な世界ではぼんやりとしか認識できない真理が、物質の世界で観察や実験から推測される真理のように、神の啓示や科学の権威という形で、忙しくて自分で考えることができない不敬な人々に押しつけられるのである。しかし、ソクラテスとピラトの時代から、全面的な否定の現代に至るまで、同じ疑問が突きつけられている。理性は「ありえない」と答える。人間自身のように有限で条件付きの世界では、いかなる主題についても絶対的な真理が存在する余地はないのである。しかし、相対的な真理は存在し、私たちはそれを最大限に活用しなければならない。

　いつの時代にも、絶対的なものを極めながら、相対的な真理しか教えられない賢者はいた。私たちの人種で死すべき女から生まれた者はまだ誰も、他の人間に完全で究極的な真理を教えていないし、教えることもできなかったからである。２人の人の心が完全に同じであることはあり得ないので、それぞれがその能力に応じて、自分自身を通して最高の光明を受けなければならず、人間の光ではない光からは受けられないのである。生きている最も偉大な熟練者（アデプト）は、普遍的な真理を、それを印象づける心が同化できる程度にしか明らかにできず、それ以上にはできないのである。Tot homines, quot sententiae（人の数だけ意見がある）は、不滅の真理である。太陽は一つだが、その光線は無数である。そして、その光線が照らす対象の性質や体質によって、生じる効果は有益にも悪意にもなる。極性は普遍的なものだが、偏光子は私たち自身の意識の中にある。意識が絶対的な真理に向かって高められるのに比例して、私たち人間は多かれ少なかれ絶対的に真理に同化する。しかし、人間の意識はまた、地球のヒマワリに過ぎない。暖かい光線にあこがれ、植物はただ太陽の方を向き、手の届かない光線の進路を追って、ぐるぐると動くことしかできない。その根は土にしっかりと固定され、人生の半分は影の中で過ごす。……

　しかし、私たち一人ひとりは、この地球上にいても、真理の太陽に相対的に到達し、その最も暖かく直接的な光線を、たとえそれが宇宙の物理的粒子を通過する長い旅を経て分化したとしても、同化させることができる。そのためには２つの方法がある。物質的な面で、私たちは自分の心的なポラリスコープ（偏光器）を使用することができ、そして各光線の特性を分析し、最も純粋なものを選択する。霊性の面では、真実の太陽に到達するために、私たちは自分のより高い性質の発達のために真剣に働かなければならない。心は、その媒体や乗り物、有機体の脳に依存し、不可分である。私たちは自分自身の中で徐々に低い人格の本能的欲望を麻痺させ、それによって純粋に生理的な心の声を枯らすことを知っている。私たちの中で動物人間は、霊的人間のための場所を作ることができる。そして、いったん潜在的な状態から呼び起こされると、最高の霊的な感覚と知覚が私たちの中で比例して成長し、「神聖な人間」と同等に発達するのである。これは、東洋のヨギや西洋の神秘主義者といった偉大な熟達者（アデプト）たちが、常に行ってきたことであり、今も行っていることである。

しかし私たちはまた、少数の例外を除いて世の中のどんな人間も、どんな唯物論者も、そうしたアデプトの存在や、そうした精神的・霊的発達の可能性さえも決して信じないことを知っているのだ。（古代の）愚か者は心の中で「神はいない」と言い、現代人は「地上には高尚な人はいない、あなたの病んだ空想の産物である」と言う。このことを知っている私たちは、トーマス・ディディモスのタイプの読者を安心させようと急いだ。この雑誌の中で、もっと自分に合った読み物、例えば、さまざまな作家による「物質的唯心論」に関する雑多な論文に目を向けていただけるよう、お願いする次第である。（例えば、同じ「哲学」の「自己中心主義」の記事へ、あるいはまた、この号にある「物質的唯心論者」のピラミッドの頂点に対する記事を読んでほしい。これは、問題の学校の学識ある創設者が、われわれの過ちに対して抗議した手紙である。彼は、無神論と唯物論の問題で、われわれが自分の名前をハーバート・スペンサー、ダーウィン、ハックスレーなどの名前と「結合」させていることに不満を述べている。心理学と物理学の分野でのこれらの光は、あまりにもちらつき、あまりにも「妥協」的で弱く、無神論者や無宗教者とさえ呼ぶに値すると、ルインズ博士は考えているようだからである。複コラムの「通信」、および「魔王（敵対者）」による返信を参照）。

　と言うのも「ルシファー」誌は、どのような「思想」の読者にも満足していただけるよう、また、神道家と無神論者、神秘主義者と不可知論者、キリスト教徒と異教徒に対して等しく公平な立場を示しているからである。編集者の論説、『道の光』についての論評など、そのような記事もある。これらは唯物論者のために書かれたものではない。絶対的な真理は地上にはなく、より高い領域で探さなければならないが、この取るに足りない、常に回転している小さな地球の上にさえ、西洋哲学では夢にも思われないことがまだあるのだと心の中で知っている神智学徒、または読者に宛てられたものである。

　話を元に戻そう。したがってルソーがそうであったように、私たちの多くにとって「一般的な抽象的真理はあらゆる恵みの中で最も貴重」であるにもかかわらず、一方で私たちは相対的真理に満足しなければならないのである。冷静に考えれば、私たちはせいぜい貧弱な人間で、相対的な真理を前にしても、それが私たち自身や私たちのちっぽけな先入観を食い尽くさないか、常に恐怖を感じているのである。絶対的な真理については、私たちのほとんどは自転車に乗って月に到達するのと同じように、それを見ることができない。第一に、絶対的な真理は、マホメットの山のように不動のものであり、預言者のために自らを乱すことを拒んだので、預言者は自らその山に向かわなければならなかったからである。そして、もし私たちが遠くからでもそれに近づこうとするならば、彼の例に倣わなければならない。第二に、絶対的な真理の世界はこの世のものではないのだが、私たちはあまりにもこの世のものになりすぎているからである。そして第三に、詩人の空想の中では人間は、

「天の技が作り上げたすべての完全性の抽象化されたもの」

であるにもかかわらず、現実には異常（変則）とパラドックスの残念な束であり、自分の重要性を膨らませた空の風袋（ふいご）であり、矛盾した、影響されやすい意見を持っている。人は同時に傲慢で弱い生き物であり、地上あるいは天上の権威を常に恐れているにもかかわらず、それでも

「怒った猿のように、高い天の前でそのような幻想的なトリックを演じて、天使を泣かせる」

だろう。

　さて、真理は多面体の宝石であり、そのすべての面を一度に認識することは不可能である。そしてまた、どんなに真理を見極めたいと思っている人でも、その面の一つさえ同じように見ることはできないのだから、それを認識するために何をしたらよいのだろうか。肉体的な人間は、あらゆる側面からの幻覚（幻影）によって制限され、束縛されているので、地上的な知覚の光によって真理に到達することはできない。デルポイの神託が「人よ、汝自身を知れ」と問うときから、これほど偉大で重要な真理は教えられなくなった。このような知覚がなければ、人間は絶対的な真理はおろか、多くの相対的な真理さえも見えないままであろう。人間は自分自身を知ること、すなわち決して欺くことのない内的知覚を獲得しなければ、いかなる絶対的真理をも習得することはできないのである。絶対的な真理は永遠の象徴であり、有限の心が永遠を把握することはできず、それゆえ、その完全な真理が明かされることはない。人間がそれを見たり感じたりする状態に到達するためには、外的な土でできた人間の感覚を麻痺させなければならない。これは困難な作業であると言わざるを得ないし、ほとんどの人は、この分では相対的な真理で満足することを望むに違いない。しかし地上的な真理にさえ近づくにはまず、それ自体のために真理を愛することが必要である。そうでなければ真理を認識することはできないからである。この時代、誰が真理を自分のために愛しているのだろうか。真理を求め、受け入れ、実行する覚悟のある人がどれほどいるだろうか。この社会では、成功するためには何でも、現実ではなく見かけの上に、本質的な価値ではなく自己主張の上に、築かれなければならない。私たちは、真理を受け止めることの難しさを十分に承知している。公正な天女は、（彼女にとって）気の合う土壌つまり純粋な霊的意識に照らされた、公平で偏見のない心の土壌にのみ降り立つが、これらは両方とも文明国には本当に稀な住人なのである。蒸気や電気の世紀には、人間はほとんど考える暇もないほど猛スピードで生きており、慣習や型にはまったプロクルステス（Procrustes）のベッドに釘付けにされ、ゆりかごから墓場まで流されるのが常である。現在の慣習とは、純粋で単純なもので、生まれつき嘘をつくことである。なぜなら慣習はあらゆる場合において、「受け取った基準に従った感情の見せかけ」（F・W・ロバートソンの定義）であり、見せかけがあるところでは、いかなる真理もあり得ないからである。バイロンが言った「真理は深みにある宝石である。一方、この世の表面では、すべてのものが慣習という偽りの秤によって量られている」という言葉が、どれほど深いものであるかは、このような社会慣習主義の息苦しい空気の中で生きることを強いられ、学ぶ意欲と不安があっても、社会という猛々しいモロク（訳注：セム族の神;その礼拝で，神をなだめるために親が自分の子供をいけにえにした. cf.聖書Lev.18：21; 2Kings 23：10; Jer.32：35.）を恐れて、憧れの真実を受け入れることを敢えてしない人たちに最もよくわかることだろう。

　読者よ、あなたの周りを見よ。世界的に有名な旅行者の記録を研究し、文学者の共同観察、科学や統計のデータを思い出してほしい。現代社会、現代政治、現代宗教、現代生活全般を心の眼に描いてみてほしい。太陽の下、あらゆる文化的な民族や国家のやり方や習慣を思い出そう。ヨーロッパ、アメリカ、さらには極東や植民地など、白人がいわゆる文明の「恩恵」を携えてきたあらゆる場所の文明の中心地における人々の行いや道徳的態度を観察せよ。そして今、これらすべてを見直した上で、立ち止まって考え、できるならばその祝福されたエルドラド（黄金郷）、つまり、「真理」が名誉ある客であり、嘘と偽りが追放された地球上の特別な場所の名前を挙げてみてほしい。できないであろう。あなただけでなく他の誰にも、国民生活と社会生活のあらゆる部門で頂点に君臨する虚偽の塊に、自分の一口を加える覚悟と決意がなければできないことである。カーライルはこう叫んだ。「真理は、それ（真理）に従うことで天が私を押しつぶしたとしても、偽りではない。たとえ天空のラバーランド（Lubberland）全体が背教の褒美であったとしても」。崇高な言葉である。しかし、19世紀の今日、カーライルのように考える人、語る勇気のある人がどれほどいるだろうか。巨大で恐ろしい多数派は、「何もしない者たちの楽園」、無情な利己主義のペイ・ド・コカーニュ（桃源郷）を好んでいないことがあろうか。ハリス夫人が糾弾し、グランディ夫人が非難し、改宗者が彼女の殺人的な舌によってバラバラに引き裂かれる拷問を受けないように、単なる臆病な恐怖から、あらゆる新しく不評な真理の最も影のある輪郭の前に恐怖で身をよじるのは、この大多数の人々なのである。

　無知から最初に生まれる「利己主義」、そして新しく生まれたすべての幼児に、普遍的な魂とは別の新しい魂が「創造」されると主張する教えの果実であるこの利己主義は、個人の自我と真理の間の越えられない壁である。それは人間のすべての悪徳の多産な母であり、嘘は偽りの必要性から生まれ、偽善は嘘を覆い隠したいという願望から生まれる。嘘は、あらゆる人間の心の中で歳月とともに成長し強化される菌であり、あらゆる良い感情を食い尽くしている。利己主義は、私たちの本性にあるあらゆる高貴な衝動を殺し、その信奉者の不誠実や脱走を恐れない唯一の神である。それゆえ、私たちは世界と、いわゆる今どきの社会で、それが最高位に君臨しているのを目にするのである。その結果、私たちはこの闇の神の「尊敬すべきもの」と呼ばれる、「にせもの」「ごまかし」「虚偽」の三位一体の側面の下、この闇の神の中で生き、動き、そして存在することになるのである。

　これは真理・事実なのか、それとも誹謗中傷なのか？ どちらにしても、社会の頂点から底辺に至るまで、あらゆる国家、あらゆる個人において、親愛なる自己のために欺瞞と偽善が働いていることに気づくだろう。しかし国家は暗黙の了解で、政治における利己的な動機は「高貴な国家的願望、愛国心」などと呼ぶことにしており、市民は家庭内でそれを「家庭の美徳」と見なしているのである。とはいえ利己主義は、領土の拡大や、隣人を犠牲にしての商売の競争などの欲望を生むものであり、決して美徳とはみなされない。私たちは、言葉巧みな「欺瞞」と「武力」、すべての国際的なソロモン神殿のヤキンとボアズを知り、その正しい名前である「外交」と呼んでいる。外交官は、国家の栄光と政治を支えるこの２本の柱の前に低く頭を下げ、そのメーソンの象徴である「（狡猾な）力において、この我が家は確立されるであろう」を日々実践しているからだ。つまり、力では得られないものを欺瞞によって得ているからだ。外交官の資格である「利益を確保する器用さまたは技術」は、他国を犠牲にして自国のために、真実を語ることによってはほとんど達成できないが、狡猾で欺瞞に満ちた舌によってこそ達成できる。したがって、『ルシファー』はこのような行為を「生きている、そして明らかな嘘」と呼んでいる。

　しかし、慣習や利己主義が、ごまかしや嘘を美徳と呼び、最もよく嘘をつく人に公共の像で報いることに同意したのは、政治だけのことではない。社会のあらゆる階層は、嘘の上に生きており、嘘がなければバラバラに壊れてしまう。洗練されていて、神と法を重んじる貴族は、平民と同様に禁断の果実が好きで、自分たちが「ちょっとした癖」と呼んで満足しているものを隠すために、一日中嘘をつくことを強いられるが、「真理」はそれを重大な不道徳と見なすのである。中流階級の社会は、偽りの笑顔、偽りの言葉、相互の裏切りで埋め尽くされている。大多数の人々にとって、宗教は精神的な信仰の亡骸にかぶせられた薄っぺらなベールのようなものとなっている。主人は召使いを欺くために教会に行く。飢えた牧師は、自分が信じられなくなった者を説教して、司教をだまし、司教は自分の神を欺くのだ。政治や社会の日刊紙は、ジョルジュ・ダンディンの不滅の問いかけである“Lequel de nous deux trompe-t-on ici ?"（私たちのどちらがここでだまされていますか？）をモットーにするとよいだろう。かつて「真理」の救済の錨であった科学でさえ、裸の事実の神殿であることをやめてしまった。科学者たちは、自分の名前と名声に輝きを与えるような個人的な趣味や新奇な理論を、同僚や一般大衆に受け入れさせるために、ほとんど一心不乱に努力しているのである。科学者は、異教徒の土地で宣教師が、あるいは家庭で説教師が、現代の地質学は嘘であり、進化は虚栄と精神の悩みに過ぎないと信徒を説得するように、現代における今の科学的仮説に不利な証拠を隠す用意ができているのである。

　これが西暦1888年の実際の状況であるが、しかしある新聞社は、この年を悲観的に見ていると私たちを咎めている。

　嘘がこれほどまでに広まったのは、それが習慣や慣例に支えられているからであり、年表でさえも人々に嘘を強要しているのである。ユダヤ人と異教徒、ヨーロッパとさらにアジアの地で、唯物論者と不可知論者が自国のキリスト教徒と同様に、年号の後に付ける西暦と紀元は、別の嘘を認可するために使われる嘘である。

　では、相対的な真理はどこにあるのだろうか。デモクリトスの世紀までさかのぼれば、女神が井戸の底に横たわり、その深さゆえに女神が解放される望みはほとんどなかったというのに、現在の状況下では、少なくとも月の見えない裏側のように遠くに隠れていると信じる権利があるのである。このためか、隠された真理の信奉者は皆、すぐに精神異常者とされる。しかし『ルシファー』は、いかなる場合にも、またいかなる脅威にも屈することなく、普遍的に黙認され、一般に行われている嘘に迎合することを強いられることなく、純粋かつ単純に事実を守り、いかなる場合にも、またいかなる卑怯な仮面の下にも真理を告げようとする。偏見と不寛容は、正統派で健全な方針と見なされ、真理を犠牲にして社会的偏見と個人的趣味を奨励することは、出版物の成功を確保するために追求すべき賢明な道と見なされるかもしれない。そのようにしよう。『ルシファー』の編集者は神智学徒であり、そのモットーは次のように決められている。Vera pro gratiis.（慈悲のための真理）。

　彼ら（『ルシファー』の編集者）は、『ルシファー』が真理という女神に捧げた酒と生け贄が、マスコミの支配者たちの鼻に甘い香ばしい煙を送るわけでもなく、輝く「朝の子」が彼らの鼻孔で甘い香りを放つわけでもないことをよく理解しているのである。彼は、veritas odium paret（憎しみは真理に従う）と罵倒されるか、そうでなければ無視される。友人たちでさえも、彼の欠点を見つけ始めている。なぜそれが純粋に神智学的な雑誌であってはならないのか、言い換えれば、なぜそれが独断的で偏屈であることを拒否するのかがわからないのである。神智学やオカルトの教えに寸分の隙も与えず、「最もグロテスクな異質な要素や矛盾する教義の出版にページを開いている」のである。これが主な非難であり、それに対して我々はこう答える。なぜいけないのか？ 神智学は神聖な知識であり、知識は真理である。あらゆる真実、あらゆる誠実な言葉は、このように神智学の一部であり、一塊りである。神聖な錬金術に熟練した者、あるいは真理を認識する才能に恵まれた者は、正しい文からと同様に誤った文からも真理を見出し、引き出すことができる。1トンのゴミの中から失われた金の粒子がいかに小さくても、それは依然として貴金属であり、多少の余分な手間を代償にしても掘り出す価値がある。これまで述べてきたように、あるものが何ではないかを知ることは、それが何であるかを知ることと同じくらい有益であることが多い。平均的な読者には、宗派的（分派的）な出版物の中に賛否両論のあらゆる側面を持つ事実を見出すことはほとんど期待できない。なぜなら、その表現はどちらかに偏り、編集者の特別な方針が向けられた側に天秤が傾くようになることは確実だからである。神智学誌はこのように、たとえおおよその真理と事実だけであるとしても、偏りのないものを見つけることを期待できる、おそらく唯一の出版物なのである。神智学雑誌はしたがって、おそらく人が、どんな場合でも、偏りのない、まだおおよその真理と事実しかないとしても、それを見つけることを望むことができる唯一の出版物なのである。

　『LUCIFER』には、哲学的、宗教的な見解が排除されていないため、裸の真実がさまざまな側面から映し出されている。そして、あらゆる哲学や宗教が、いかに不完全で、不満足で、時には愚かであっても、何らかの真理や事実に基づいているはずであるから、読者はそこで論じられたいくつかの哲学を比較し、分析し、選択する機会があるのである。『ルシファー』は、その限られたスペースが許す限り、一つの普遍的な宝石の多くの面を提供し、読者に言う。「今日あなた方は誰に仕えるか選ぶがよい。人間の推理力と神聖な知識を水没させた洪水の向こう側にいた神々か、習慣と社会的虚偽のアモリ人（訳注：シリア・パレスティナ地方に住んだセム系遊牧民；Gen10：16）の神々か、はたまた（最高の）自己の主、すなわち幻影の暗い力を破壊する輝く破壊者か、を」。確かに、人間の不幸の総計を増やすのではなく、減らす傾向のある哲学こそ、最良のものである。

　いずれにせよ、選択肢はそこにあり、この目的のためにのみ、私たちはあらゆる種類の寄贈者にこのページを開いているのである。したがって、神とキリストを信じながら、野心的で高慢な教会の邪悪な解釈と強制的な教義を拒否するキリスト教聖職者の見解や、神と魂と不死を否定し、自分自身しか信じないヒイロ・イデアリストの教義が、この中に見出される。そう、私たちに対する嘲笑や個人的な発言、私たちにとって大切な神智学の教義に対する罵倒で、この雑誌のページを埋めることに躊躇しない人たちでさえもである。無神論者が主宰する自由思想誌が、神秘主義者やセオソフィストのオカルト的見解やパラブラフマンの謎を賞賛する記事を挿入し、それに対してほんの少しくだけた論評を加えたとき、ルシファーはライバルを発見したと言えるであろう。キリスト教の定期刊行物や宣教団体が、自由思想家のペンからアダムとその肋骨に対する信仰を揶揄する記事を受け入れ、その編集者の信仰であるキリスト教に対する批判を静かな沈黙のうちに通過させるとき、それは『ルシファー』に値するものとなり、神智学の出版物と同じレベルに置かれることができる許容性の程度に到達したと本当に言えるかもしれないのである

　しかし、これらの機関誌のどれもがそのようなことをしない限り、彼らはすべて宗派的で、偏屈で、不寛容であり、真理と正義という考えを持つことはできない。『ルシファー』やその編集者たちに対して陰口を叩くことはあっても、どちらにも影響を与えることはできない。実際、その雑誌の編集者たちは、神智学の中に偏見やいかなる種類の傲慢さも全くないことの証人であり、それが説く教義の神聖な美しさの結果であるとして、そうした批判や非難を誇りに感じているのである。なぜなら神智学は、前述のように、すべての人に聴聞と公平な機会を与えているからです。神智学はいかなる見解も…誠実であれば…完全に真理を欠いているとはみなさない。神智学は、考える人間がどのような思想階級に属していようとも、それを尊重する。哲学に利益をもたらすことなく混乱を引き起こすだけの思想や見解に反対する用意が常にあり、その解説者が個人的に好きなことを信じるようにし、彼らの考えが良いものであれば、それを正当化するのである。実際、ある哲学者の結論や推論が、私たちの見解や私たちが説く教えに全く反対であっても、その前提や事実の記述は極めて正しく、たとえ私たち自身がそれを拒否したとしても、より高度で真理に近いものを持っていると信じて、他の人々がその反対側の哲学によって利益を得るかもしれないのである。いずれにせよ、私たちの信仰の公言は今や明白であり、前述のページで述べたことはすべて、私たちの編集方針を正当化し、説明するものでもある。

　絶対的真理と相対的真理について考えをまとめると、前に述べたことを繰り返すだけである。人間は、普遍的な心（マインド）と一体となっている、ある種の高度に精神的で高められた心の状態の外では、つまりこの地上では、どんな哲学や宗教からも相対的な真理しか得ることができない。井戸の底に住む女神でさえ、監禁されている場所から出ることができたとしても、人間が同化できる以上のものは人間に与えられない。一方、誰もがその井戸…その名は「知識」…の近くに座り、その深淵を見つめ、少なくとも暗い水面に映る真理の美しい姿を見ようとすることができる。しかし、リヒターが指摘したように、これはある種の危険性をはらんでいる。確かに、ある種の真理は、鏡のように私たちが見つめる場所に時折映し出され、忍耐強い学習者に報いてくれるかもしれない。しかし，このドイツの思想家は，「哲学者の中には，真理に敬意を表するために，水の中に自分の姿を見て，代わりにそれを崇拝した者がいると聞いたことがある」と付け加えた。.. . .

　このような災難、宗教的あるいは哲学的な学派の創始者のすべてに降りかかっているものを避けるために、編集者たちは、自分たちの個人的な頭脳に反映される真理だけを読者に提供しないように細心の注意を払っているのである。編集者たちは一般大衆に幅広い選択肢を提供し、宗派主義の道の主な目印である偏見と不寛容を示すことを拒否しているのである。しかし、比較のために可能な限り広い余白を残しておきながら、我々の反対者たちは、もし神智学の見解と対照的であれば、その最も顕著な特徴に対する指摘や正当な批判なしに、我々の『ルシファー』の澄んだ水に自分の顔を映し出すことは望めないのである。

　しかし、これは出版雑誌の表紙の内側だけで、哲学的真理の単なる知的側面に関する限りにおいてである。より深い精神的、宗教的な信念については、真のセオソフィストが公開討論に付すことでその品位を落とすようなことがあってはならず、むしろ、自分の最も奥深い魂の聖域の奥深くに大切に隠しておくべきものである。そのような信念（信仰）や教義は、無関心な人々や批判的な人々の乱暴な扱いによって、避けられない冒涜の危険があるため、決して軽率に公表してはならない。また、一般大衆の思考する部分の考察に提供される仮説として以外は、いかなる出版物にも具現化されるべきではない。神智学的真理は、それがある種の思索の限界を超えるとき、一般の人々の視界から隠されたままであるほうがよい。それは「聖なる場所」、すなわち非人格的な神の自我、あるいは内在する「自己」の神殿の外に引きずり出されるべきものではない。なぜなら、その知覚の外にあるすべての事実は、私たちが示したように、せいぜい相対的な真理に過ぎないのだが、絶対的な真実からの光線はそれ自身の炎、私たちの最高の霊的意識の、純粋な鏡の中にのみ自らを映し出すことができるからである。そして、（幻影の）闇は、その中で輝く光をどのように理解することができるだろうか。

(『ルシファー』1888年2月号より）。